

世界ジオパークネットワーク申請候補地域  
現地審査報告書

隠岐

# 隠岐ジオパーク 現地審査報告書

尾池和夫、菊地俊夫、渡辺真人（事務局）

期間：2011年8月22-24日

主な参加者（敬称略）

永原淳（隠岐支庁長、推進協議会長） 松田和久（隠岐の島町長、推進協議会副会長）  
山下博徳（隠岐支庁県民局長、協議会幹事） 門脇裕（島根県隠岐の島町副町長） 澤田恭一（海士町副町長） 佃稔（海士町教育長） 吉岡陽子（協議会副会長、風待海道倶楽部会長） 野辺一寛（隠岐の島町生涯学習課） 板倉宏文（島根県環境生活部自然環境課長） 斎藤一志（旅館松浜、ガイド） 八幡浩二（八幡黒曜石店、ガイド） 山内靖喜（島根大学名誉教授） 高須晃（島根大学教授） 林（島根大学准教授） ほか

見学地点：銚子ダム、浄土ヶ浦、摩天崖、通天橋、焼火神社、白島海岸、トカゲ岩、中谷、布施海岸、隠岐自然館、八幡黒曜石店、福浦海岸など

現地審査のまとめ

## 1) ジオサイトと保全

魅力的なジオサイトが多数あり、生態系とのつながりは興味深く、文化・歴史的サイトも豊富で、世界ジオパークとしてのポテンシャルがある。隠岐全体として、自然環境を保全した上で観光に生かしていこうという方針がある。しかし、「大陸から島々へ」というキャッチコピーは隠岐の魅力を表現しておらず、ジオサイトでの解説、見せ方は、見る側に隠岐のジオ・動植物・人間生活のつながりを十分に感じさせるようにはなっていない。世界でもっとも新しい縁海である日本海の中にある島として、日本列島と氷期にはつながり、間氷期には島となって暖流である対馬海流の影響を受ける中で形成された、高山帯の植物が温帯の植物と共存する独自の生態系という、島の地学的位置や地史と生態系のつながりを十分に見せていない。

説明板は日本ジオパーク認定後ほとんど増えていない。来年・再来年度に予算措置がなされており、それで設置するとのことである。説明板案があるが、サイトの個別的な説明のみにとどまっており、山陰海岸・室戸などを参考にサイトのジオパーク全体の中での位置付けもわかるような工夫が必要である。

拠点施設として隠岐の入口である島後の西郷港に隠岐自然館があるが、ジオパークの拠点としては不十分である。標本などを使って隠岐の自然を個別に紹介しており、ジオパーク的なストーリーを見せるものにはなっていない。広いスペースが残っており、そこにジオサイト・モデルコース紹介などジオパークのインフォメーションセンター的機能が必要である。島前にも拠点が必要である。

10年以上エコツアーをやって来たレベルの高いガイドが二人いて、それぞれ得意分野はあるものの、ジオ・動植物・歴史文化を客の興味に応じて案内できる。詳細なガイド講習テキストに基づきガイド養成が進んでいる。ジオパークに特化したガイドブックはなく、またジオサイトマップはあるが、ジオパークをわかりやすく紹介したパンフレットはない

## 2) 教育・研究活動

従来より「風待ち海道倶楽部」という団体が地域の自然・文化資源の学習会を開いてきた。ジオパークも協議会、この団体を通じて普及が行われている。小・中・高でジオパークの普及とジオサイトを使った野外教育を行っており、高校生が小学生向けにジオパークの紙芝居を作った例がある。

島根大学がジオパークの学術面をバックアップしており、ガイドブックの作成、ガイド講習会や各種イベントに協力している。また、大学院生の研究のフィールドとして隠岐を活用している。動植物の調査は、県と環境省の協力で行われており、最近各地の大学の研究者により、DNA 解析を用いて分子系統学と生物地理学を組み合わせた研究が行われている。

## 3) 管理組織・運営体制

ジオパーク推進協議会は今年 4 月から県の隠岐支庁を事務局とし、5 人体制である。県と隠岐の島町の職員、協議会雇用の職員で構成されている。事務局全町村から事務局員が出ているわけではないが、隠岐支庁の支援の下島前・島後全体でジオパークを進めようとしている。5 人のうち 1 人が地質学の修士である。世界ジオパークネットワーク加盟にむけて組織強化が必要である。国の関係機関との連携は取れており、協議会作成の統一デザインの説明板を関係機関・県の予算で今後設置する予定である。協議会と既存の観光・まちづくり関係団体との連携は、少なくとも島後においては良好である。隠岐汽船やホテルなど観光業者との連携はまだ充分ではない。

## 4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

10 年以上のエコツアーの実績があり、年間 1000 人以上を有料で案内するレベルの高いガイドがいる。旅行代理店募集のエコツアーも行われている。これらのエコツアーでも、ジオサイトを見ることが日本ジオパーク認定以前より増えている。イオングループと一昨年からは提携しており、WAON カードの売上げの一部を寄付として受け取ると共に、イオングループ募集のジオツアーや、イオングループの研修旅行を引き受けている。シーカヤックによるジオツアーも行われている。遊覧船による島前北西岸観光は、船長の案内をもう少し工夫するか、わかりやすいガイドマップがあれば良いジオツアーである。しかし、観光案内所、ホテル、隠岐へ渡る船などにジオパークの案内はなく、ジオパークを観光に十分生かしているとは言えない。ジオパーク関連商品の企画、島の幸・海の幸をジオパークとしてアピールするような試みはまだなく、

住民、観光業界等にジオパークがまだ十分に浸透していない。

## 5) 国際対応

パンフレット、説明板などの多国語対応はこれからである。現状では外国からの観光客が通訳なしで島内を巡ることは現実的とはいえない。島前にニュージーランドから移り住んでガイド活動をしている人がおり、こうした人たちの活用により海外からの観光客への対応を行う必要がある。

## 6) 防災・安全

活火山はなく地震も少ない地域であるが、土石流災害が起こることがあり、そうした地域では防災教育が行われている。海岸沿いで活動が多くなるジオパークなので、海難対策は重要である。

